

 <p>ぐんま日独協会 会報</p>	<p>2019年8月17日</p> <p>54号</p>
	<p>発行者 鈴木 克彬 発行所 ぐんま日独協会 〒371-0105 群馬県前橋市富士見町石井 2445-219 電話 : 027-288-4297 E-mail : info@jdg-gunma.jp</p>

ホームページ : <http://www.jdg-gunma.jp/>

ホームページの右下『ハイマート』から本誌をカラーでご覧いただけます。



【三遊亭竜楽師匠講演会「日本の笑いが世界を駆ける」】

1. 会長のことば	2
2. 第8回ドイツフェスティバル in ぐんま	3～4
3. 三遊亭竜楽師匠口演会	5
4. ドイツ炭鉱派遣の思い出 (連載-5)	6～7
5. 日本百名山 - 独訳 (連載-4)	7～13
6. デザイナー修行奮闘記 (連載-13)	14～15
7. 第8回「ドイツフェスティバル in ぐんま」慰労会・反省会	16
8. ドイツ人高校生の群馬短期留学終了	16

1. 会長挨拶

第8回ドイツフェスティバル in ぐんま

パネル展『ドイツに渡った日本文化』を実施して

ぐんま日独協会 会長 鈴木克彬

2005年の「日本におけるドイツ年」を契機に、群馬県庁ホールを会場としてスタートした『ドイツフェスティバル in ぐんま』は隔年実施のため、今年6月の開催で第8回を迎えました。今回のフェスティバルのメイン行事であるパネル展のテーマは『ドイツに渡った日本文化』です。このテーマは寺澤行忠先生（慶応義塾大学名誉教授・現横浜日独協会理事）の著書を参考とさせていただき、協会内で8名程のチームをつくり、約半年間調査研究してまとめました。

昨今有名なマンガ・アニメ、寿司・ラーメン等の日本食、長年に亘る柔道・空手等の武道、その他生け花・盆栽等々、その内容は多岐にわたっています。その各々の部門で尽力された日独両国関係者の熱心さ・粘り強さには、心から感服、敬意を表したいと思います。

私は今回の調査から多くのことを知り・学びましたが、その中で特に次の2点に関心を持ちました。

◎日独俳句の普及・浸透

俳句に『季語』等多くの約束事があり、語句を習得・使用するにはそれなりの勉強が必要な文化だと思います。それだけに独訳の場合にも、適切なドイツ語の選択が必要です。それがドイツでミュンヘンをはじめ、多くの都市で俳句会が有るとか・・・驚きです。更にドイツ人が蕪村の俳句を独訳し、それを歌曲にしたとの実例も紹介されました。

◎日本の美術・工芸品がドイツの多くの美術館・博物館に今回のフェスティバルのパネル展開催のため、今年の初め当協会員が、ドイツの美術館を訪問し、江戸・明治時代に日本からドイツに渡った美術品・工芸品を確認して来ました。ベルリン国立アジア美術館、ドレスデン美術館、ミュンヘン五大陸博物館、リンデン博物館(シュトゥットガルト)等々10の美術館の名前が報告されました。保管されている美術品の渡独経緯は、シーボルト先生、ベルツ博士、東インド会社経由等々、いろいろあると思いますが、詳細は不明です。とにかく現在ドイツで沢山の日本の美術・工芸品が大切に保管されているとのことです。

私は来年の5月末頃、10日から2週間程かけて訪独し、関連の美術館巡りをしたいと思っています。

2. 第8回ドイツフェスティバル in ぐんま ((公財) 日独協会ミリアム・グリットナーさん記) Deutschlandfest in Gunma 2019 (Miriam Grittner JDG)

Vom 28.-30.Juni veranstaltete die JDG Gunma, im Prefectural Government Building, nun zum 8 Mal, das „Deutschlandfest in Gunma“. Ob jung oder alt, bei dem vielfältigen Angebot an deutschen Produkten und deutscher Kultur, war für jeden etwas dabei. Während im Außenbereich Porsche, Audi und Mercedes bestaunt werden konnten, wurden drinnen Wein, Bier, Tee, Wurst, Brot, Accessoires, orthopädisches Schuhwerk und Spiele verkauft, natürlich alles aus Deutschland oder zumindest nach deutschem Rezept. Für die Bastler unter den Gästen gab es die Möglichkeit in einem Workshop Teddybären selber zu machen, während die Volkstanzgruppe aus Maebashi und der Chor Shion mit Tanz und Musik für gute Stimmung sorgten. Selbst jene, die „einfach nur mal gucken“ wollten, sollten bei den vielen Leuten in Tracht ihren Spaß gehabt haben.

Verpasst? Keine Sorge, für 2021 wird schon das nächste Deutschlandfest in Gunma geplant.



【ドイツ各自動車メーカーの車が勢ぞろい】



【手づくりテディベアのワークショップ】



【コーラスグループによるドイツ歌曲の披露】



【ドイツ直輸入のパン・ソーセージを販売する
ぐんま日独協会のブースに長蛇の列】



【パネル展『ドイツに渡った日本文化』会場】

ドイツフェスティバル in ぐんま 2019

6月28日から30日まで、8回目の「ドイツフェスティバル in ぐんま」がぐんま日独協会主催で、群馬県庁において開催された。多様なドイツの商品や文化が紹介され、誰でも関心を持てる物を見つけられたはずだ。会場の外では、車のファンがポルシェ、アウディやベンツなどのたくさんのドイツ車を鑑賞し、中ではドイツワイン、ビール、お茶、ソーセージ、パン、アクセサリー、靴やゲームが販売された。



【ドイツ製品を扱うその他のお店にも大勢の来場者が訪れます】

クリエイティブな方のためにドイツのテディベアを作るワークショップもあり、前橋フォークダンス協会とコール・詩音という合唱団がイベントをダンスと音楽で盛り上げた。民族服を着たスタッフも多かったのも、ただ見に来た方もきっと楽しんでいただろう。見逃した？ご心配なく！2021年に次のドイツフェスティバル in ぐんまが予定されている。



【コール・詩音による合唱】



【前橋市フォークダンス協会によるフォークダンスの披露】

3. 三遊亭竜楽師匠口演会 (事務局)

遅い梅雨明けから一転して猛暑日が続く8月3日(土)に県庁ビジターセンターにおいて三遊亭竜楽師匠の講演会(落語の世界では口演会)がぐんま日独協会の主催で行われました。「なぜ、ぐんま日独協会で落語家が講演?」と思われる方が多いと思いますので、この経緯についてまず説明をする必要があるでしょう。

今年、6月28日~30日の3日間、第8回「ドイツフェスティバル in ぐんま」を開催しました。毎回テーマを決めてパネル展を行っています。今回のテーマは『ドイツに渡った日本文化』でした。横浜日独協会理事の寺澤行忠慶應義塾大学名誉教授の同名の著書をベースに勉強会を行いました。この著書の中で、海外で現地語で落語をする落語家・三遊亭竜楽師匠がドイツでも毎年落語をドイツ語で口演していることを知りました。この三遊亭竜楽師匠が実は前橋市出身で前橋市の観光大使を務めていることが分かりました。そんなことで、日本文化が凝縮された落語をどのように外国人にわかってもらうのかという素朴な好奇心から、早速竜楽師匠に講演の打診をしたところ、快諾をいただいたという次第です。

海外口演の始まりはイタリアからでした。はじめはどうやって良いかわからず試行錯誤の連続だったようです。イタリア人から習ったイタリア語を丸暗記して、イタリア語が詰まると表情やパントマイムでつないたり、はたまた日本語で繋いでも、客席からは大きな笑い声が響いたそうです。それからフランスやスペインに広がり2011年にはドイツでも始めました。きっかけはベルリンの総領事や落語を研究しているベルリンのドイツ人先生から依頼されたことです。その時にドイツに居る複数の日本人に相談すると全員が、ドイツで落語が理解されるはずがない、と反対され憂鬱な気分が始めたそうです。ところが実際はどうだったのか... イタリアとドイツで行った口演をDVDで見せていただき、現地の雰囲気がよくわかりました。イタリア人が笑うというのは感覚的によく理解できますが、驚いたことに大勢のドイツ人が大声で笑い転げるのを見てたまげました。おお、ドイツ人もこんなに笑い転げるのだと。

世界各地で落語をしていて、一番笑わないのが実は日本人だということです。なぜか?それは日本が平和だから。道で見ず知らずの他人とすれ違う時、ドイツをはじめ外国では必ず挨拶をします。これは「私はあなたに敵意を抱いていません」ということを示すため、平和な日本ではその必要がない。なるほど。



【講演中の三遊亭竜楽師匠】



【最後にお礼を述べる対馬副会長。
師匠の手には鈴木会長夫人
手づくりのテディベアが】

4. ドイツ炭鉱派遣の思い出 - その5 (会員 對馬 良一 記)

日独二人の親友との永遠の別れ - その1

3月(事務局註:平成30年3月)だというのに外は冷たい風が吹き荒れ寒い一日でした。3月2日夕方の6時頃家内と雑談中、電話が鳴った。元気よく電話口に出たが東京の高口さんの奥さんからでした。「對馬さん、主人が亡くなりました」えっ、ガーン、後は奥さんが何を言ったのか解りませんでした。家内の「どうしたの?」の声ではっと耳を澄ませた。2月27日の朝、息を引き取ったとのことでした。

彼は、私達西独派遣炭鉱労働者のリーダ的存在で、特に我々Gelsenkirchenの誰もが認める大黒柱でした。電話が切れた後も信じられない気持ちでこんなショックなことは経験したことがなかった。

昭和33年当時の西ドイツ政府と日本政府との政府間協定で3年間の期限で炭鉱技術の先進国西ドイツで働きながら、ドイツの炭鉱技術習得に全国の炭鉱から選抜された60名の派遣でした。高口さんは、九州工業大学鉱山工学科卒業の三井鉱山職員の身分のままでした。私は三菱鉱業から、高口さんは三井鉱山からの派遣でした。

初めて会った時からすごい人がいると心強く感じていました。当時、派遣団長に選ばれ私達の世話役もやってくれた。英語が達者で機内では通訳の役もやっていました。三年間苦楽を共にしながら、渡航も自由にならない時代一ドル360円当時に、ヨーロッパのど真ん中のドイツで、働きながら炭鉱技術を勉強し余暇にはイタリア、フランス、スペインなどを旅行したことは楽しい思い出でした。高口氏は帰国後の昭和39年の東京オリンピックでは通訳としてドイツ統一選手団の団長付き通訳に選ばれ、私達の誇りでもありました。

三井グループの週刊広報紙、三友新聞に30回にわたり「グリュックアウフの日々、懐かしきドイツ炭坑節」と題して、連載された。その記事を読んだ私は、単行本にすることを企画し全国の仲間呼びかけ資金を調達し発刊できた。

東京勤務になった私達は、東京駅の地下食堂で仲間の動向や本の編集会議など何度もやりました。単行本は表題を「地底の客人」とし平成4年にできた時は自分の事のように嬉しかった。

その後、二人で写真集を作ることを決め、派遣団一の写真家、宇部興産出身の草村さんに協力をお願いし、全国に居る仲間にも再度呼びかけた。皆さんの強力な支援を受け2年後の平成6年12月に“Unser Gelsenkirchen 1958/1961“を出版することができた。

私の単身赴任先沼田市のバイスバーデンというドイツ名のマンションの部屋一杯に全国から送られてきた写真を広げ、住居、余暇、労働、旅行などに選び分けて作成した。高口さんは説明を日本語とドイツ語で書き、原稿をBochumの鉱山博物館のクローカー博士に創成をお願いいたしましたところ、絶賛のコメントをくださった。「ドイツには多くの外国人労働者が働いているが、貴方たち日本人のてになるこの写真集はすべてのドイツ人にとって外国人従業員との良好な親善関係がいかに大切かを示すまさに模範となる立派な写真集で感激した。写真も説明文もまったく

素晴らしい」と結んであった。嬉しかったです。二人で温泉に入りビールを飲みながら喜び合い、全国の仲間に電話を掛けまくった。このことは、つい先日のように思い出される。クローカー博士は女性ですが、その後、何度も手紙を戴いた。特に思い出するのは、ドイツの出版社の担当者からクローカー博士を通じて写真を使用させてほしい旨の手紙を何度もいただいた。その都度お互いに連絡しあい、必ずこの著作権の所有者は、グリュックアウフ・ゲルゼンキルヘンに有ると伝えることを忘れずに話し許可した。

高口さんと次なる構想もしていた。西ドイツ政府と日本政府との政府間協定によってこの事業は行われたが、60年以上も経ったこの派遣事業を知っている人も少ないと思う。いつまでも忘れないため、後世に残すためには、書籍として残すことが一番効果的である。本のカバーは本箱でも倒れないハードカバーにしようなどと決め、次回は当時の「ドイツと日本の比較集」を作る構想でした。

しかし、もう出来ません。高口さんは独学でフランス語を勉強し、日本政府からフランスに派遣され勤務したこともあった。「地底の客人」のイラストも全て自分で描き暇なときは、絵筆を執り銀座で個展をやるのが夢です、と言っていた。文筆家で、画家で、音楽家で翻訳家で素晴らしい友人でした。

病名は多発性骨髄腫でした。病魔が憎い・・・高口さん苦しかったですでしょう、痛かったですでしょう、悔しかったですでしょう、残念だったでしょう。

安らかにお休みください。貴方がいかれる天国には、一緒にドイツで苦楽を共にした多くの仲間がいます。

貴方の弾くヴァイオリンで何百回も歌ったドイツ炭坑の唄、“グリュックアウフ”の唄を皆で歌って下さい。

私の恩師のような存在であり、友人である高口岳彦さんの御霊に感謝とお礼を申し上げ記述を終わります。 合掌

(続く)

5. 日本百名山 (連載-4) (会員 深田勝弥 記)

1. 利尻岳 (1718 米) ^{りしりざん} 利尻山 (1721m)

1. Rishiri-dake (1718 m) Rishiri-san (1721 m)

1-06 からの続き

1-07

私達は杓形から登った。此の道は一番新しく、道のりも長い。ややだらだらした裾野を登って森林帯を出ると、見晴らしがよくなる。眼の下の海岸に打ち寄せる白波がレースで縁取ったようにはっきり見え、その先に細長い礼文島が浮かんでいる。もうそのあたりは匍松の敷きつめた高山帯で、ゴゼンタチバナの赤い実が道傍を綴ってい

た。

Wir sind von Kutsugata aufgestiegen. Die Route ist am neuten und lange Strecke. Auf dem etwas sachten Weg und durch das Waldgebiet gegangen, haben wir einen guten Überblick. Von hier aus sehen wir deutlich die weiße Welle ans Ufer schlagen, wie eine Randverzierung. Noch weiter schwimmt die länglich förmige Insel Rebun. Diese Gegend ist schon von der Kriechkiefer bedeckten Gebirge und die roten Früchte „Gozen-tachibana“ reiheten sich am Pfadrand.

1-08

暴風一過後だったので大気は澄んでいたが、風は強く絶えずゴーゴー鳴っていた。下の方は鮮やかに晴れているにも拘らず、頂上にかかった雲がなかなか取れない。海洋の気流が頂上にぶつかって、そこで絶えず湧かせている雲だから、これはあきらめるより他はない。

Nach dem Sturm, da wurde die Luft klar, war der Wind aber stark und heuhlte ständig. Obwohl es unten heiter ist, ziehen die Wolken sich aus dem Gipfel nicht. Denn der Luftstrom aus dem Meer stößt sich ständig am Gipfel, deshalb müssen wir darauf nur verzichten.

1-09

出発点が海拔ゼロ米であるから、千七百米を越える霧の頂上まで、ゆっくり登って八時間もかかった。じっと立っておれないくらい風が強かったが、その強い風が瞬時霧を追い払って、眼の前に見事な眺めをみせたくれた。それはローソク岩と呼ばれる大岩柱で、地から生えた牙のように突っ立っていた。それが流れる霧の間に隠見するので、よけいに素晴らしいものに見えた。

Wir brauchten acht Stunden lang, um von Zero Meter ü.d.M. bis nebelingen Gipfel eine Höhe von über 1.700 Metern zu erreichen. Der Wind weht hier so stark, dass man nicht stehen kann. Am Augenblick bläst der Wind den Nebel ab, dann zeigt sich ein wunderbarer Überblick. Der ist ein großer und steiler Fels genannt Rohsoku-iwa (Kerze-Fels). Er steht, wie der aus dem Boden durchbrechende Fangzahn. Dazu sieht er noch herrlicher wegen des fließenden Nebels aus.

1-10

帰途は鬼脇へ下る予定であったが、この強風の中、岩の瘦尾根は危険だということで、駕泊道をとることにした。この下り道はやさしいが実に長かった。駕泊の町に入った時はもう暗くなっていた。

Obwohl wir auf dem Weg nach Oniwaki bergab gehen will, wählten wir die Route nach Oshidomari, weil es zu gefährlich ist, auf dem schmalen Bergrücken zu gehen. Der Rückweg war leicht aber sehr lang. Als wir in Oshidomari angekommen war, war es schon dunkel.

1-11

翌日の午後、私たちは利尻島を離れた。きれいに晴れた秋空であった。^{わっかない} 稚内へ向かって舟が島から遠ざかるにつれて、それはもう一つの陸地ではなく、一つの山になった。海の上に大きく浮かんだ山であった。左右に伸び伸びと稜線を引いた美しい山であった。利尻島はそのまま利尻岳であった。それもいよいよ遠くなり、稚内の陸地が近づいて来た。やがて山も消え、その山の形に白い雲が一と所海面に湧き上がっているのが、利尻岳の最後の面影であった。

Am nächsten Nachmittag sind wir mit der Fähre von der Insel Rishuri nach Wakkanai abgefahren. Es war herrliches Herbstwetter. Je ferner von der Insel fährt die Fähre, desto immer verwandelt sich in keines Festland die Rishiri, sondern in den Berg. Der war ein auf dem Meer schwimmenden großer Berg und ein rechts und links weit seinem Grat ausgedehnter schöner Berg. Die Insel Rishiri war selbst der Berg Rishiri. Er entfernte sich immer ferner und Wakkanai kam näher. Bald danach ist er ganz geschwunden und die weiße Wolke aufquellt, wie der Berg. Das war sein letztes Bild Rishiris.

利尻山 海の霞に 消えにけり

勝弥

Der Berg „Rishiri“
sich aus dem Schiff entfernend,
verschwunden im Dunst.

Katsuya

30. Apr. 2015

24. März 2018

2. 羅臼岳 (1661 米)

千島を失った今日、日本の東北端は知床になった。オホーツク海に向かって長く差し出したこの半島は、荒涼としたこの僻地に憧れる人たちにまだ夢を残している。その知床の代表として羅臼岳を上げるのは、決して不当ではあるまい。

Der Rausu-dake

2-1

Heute, seitdem Japan die Kurilen verloren hatte, ist das Land nordöstlichstes in Japan zu Shiretoko geworden. Diese Halbinsel, die ins Meer Okhotsk lang hervorstehend, ist noch das Traumland für Leute, die sich nach der abgelegenen öde Gegend sehnen. Es ist wohl nicht ungerecht, dass den Berg „Rausu“ zum Vertreter des Shiretokos auszuwählen.

知床半島というのは、細長い山脈の突出であって、殆ど平地がない。海のきわまで山が迫っている。その山脈のおもな峰々を半島の付け根の方から数えていくと、海別岳、遠音別岳、羅臼岳、硫黄山、知床岳などがあり、羅臼岳が最も高い。全体が火山脈であるが、ほとんどが死火山であって、現在活動しているのは硫黄山だけである。

2-2

Die Halbinsel Shiretoko ist ein lang hervorstehender Gebirgszug, dessen Fuß sich bis an die Küste erweitert ist. Also hat sie fast keine Ebene. Wenn ich jeden hauptsächlichen Gipfel von der Wurzel in der Reihenfolge sage, ist er „Unabetsu-dake“, „Onnebetsu-dake“, „Rausu-dake“, „Iohsan“, „Shiretoko-dake“. Der Rausu ist darin am höchsten. Nur Iohsan ist noch jetzt tätig und andere sind erloschene Vulkane.

知床の山々が登山の対象になり出したのはそう古いことではない。北海道の中でもこの僻遠の山が一番あとまで取り残された。始め北大の山好きの学生たちによって登られたが、それが多くは雪積期とであったのは、夏よりも冬の方があるきよかったからであろう。というのはこの山脈はすごい匍松に覆われているからである。海別岳や羅臼岳以外の山へ行こうとすると、匍松との悪戦苦闘を覚悟せねばならない。

2-3

Es ist nicht so alt, dass man auf die Berge in Shiretoko zu steigen begann. Vor allem diese abgelegenen Berge in Hokkaido sind bis zum Ende in Vergessenheit gekommen. Zum ersten Mal wurden die Berge von den das Gebirge liebenden Studenten der Universität Hokkaido bestiegen. Sie stiegen meistens in der schneebedeckten Zeit auf, weil die Berge im Sommer von viel Kriechkiefer bedeckt sind. Wenn man die Berge außer dem Unabetsu-dake und Rausu-dake besteigen will, muss man sich auf einen schweren Kampf gegen die Kriechkiefer gefasst machen.

羅臼岳が知床富士と呼ばれるのは、羅臼村からすぐ眼前に形の良い円峰のそびえているのが見えるからだろう。村は海辺にあるし、そこから直線距離八キロで、掛け値なしの1661メートルを仰ぐのだから、山は大きく立派に違いない。違いないと言うのは、私は羅臼岳に登るため天気を待って村の宿屋に四晩も過ごしたが、ついに山を仰ぐことができなかつたからだ。ただ写真で察しただけである。

2-4

Der Grund, warum der Rausu den „Shiretoko-fuji“ genannt, ist wohl dass der Berg aus nächsten Nähe des Dorfs vor Augen als ob sich erhebende Kuppel aussähe. Das Dorf liegt am Meer und der Berg ragt netto 1661 Meter hoch, und

sich vom Dorf gerade 8 Kilometer entfernt. Daher muss er schön und groß aussieht. Warum ich „muss“ sage? Ich habe vier Nächten lange in der Unterkunft auf das gute Wetter gewartet, um den Rausu zu besteigen, aber ich konnte sogar den Berg nicht aufsehen. Ich habe mir vergeblich ihn nur durch das Foto vorgestellt.

羅臼村は知床半島唯一の都会で、一本筋の通りには、映画館やパーマネット屋やバーまであった。バーに漁期に集まってくる季節労働者のためのものらしい。村を出外れたところが港になっていて、むやみと鳥が群れていた。すぐ前の海には今はソヴェトのものとなった国後島が大きく横たわっている。

2-5

Das Dorf Rausu ist einziges Städtchen in der Halbinsel Shiretoko und an ihrer einziger Straße befindet sich ein Kino, ein Damensalon und sogar eine Bar. Die Bar ist wohl für die Gastarbeiter, die in der Jagdzeit hier herbergen. Äußer dem Dorf gibt es einen Landungsplatz und darüber fliegen die Schar von übermäßigen Vögel. Vor meinen Augen liegt groß die Insel Kunashiri, die jetzt schon der Sowjetunion gehört ist.

羅臼はアイヌ語で「鹿、熊などを捕らえると必ずここに葬ったため、その臓腑や骨のあった場所」という意味だそうで、ラは「動物の内臓物」、ウシは「たくさんある所」を意味するという。ラウシと呼ぶのが正しく、古い地図には良(ら)牛(うし)と書かれている。

2-6

Man sagt, das Wort „Rausu“ bedeute auf der Ainu-Sprache der Ort von Organ und Knochen der Tiere, weil sie in diesen Ort begrabt wurden. „Ra“ bedeute Organ und „Ushi“ bedeute, viel vorhanden zu sein. Streng gesagt, ist es richtig, Raushi statt Rausu auszusprechen, weil Raushi auf der alten Landkarte steht.

村に誠諦寺というお寺があって、住職の西井誠諦師が羅臼岳の開発に力を入れておられる。村から登山道が開かれたのも西井さんなどの尽力であって、それは昭和29年(一九五四年)のことであった。

それまでは羅臼岳へ志す人は、半島の北側の宇登呂から岩尾別を経て登った。岩尾別からイワウベツ川を遡ると温泉があって、そこが登山の良い足場になっていた。距離からいうと岩尾別の方が頂上に近いので、この方の登山道が先に開けたのであろう。

2-7

Herr Joutai Nishii ist Hauptpriester des Tempels namens Joutaiji in diesem

Dorf. Er bemüht sich die Erschließung des Rausudakes. Dank seinem Einsatz wurde 1954 die Route vom Dorf Rausu eröffnet wurde. Zuvor, wer auf den Rausu besteigen wollte, musste von Utoro wo in der Nordseite der Halbinsel liegt, via Iwaobetsu auf den Gipfel gehen. Von Iwaobetsu, führte man den Fluss Iwaobetsu aufwärts, danach trifft eine heiße Quelle. Dort ist es ein guter Ausgangsbasis. Denn die Strecke von Iwaobetu bis zum Gipfel ist kürzer als von Rausu, wurde diese Weg schon früher wohl eröffnet.

私は羅臼から登った。村から羅臼川に沿って一時間ほど行くと、羅臼温泉がある。村営の宿が建っているが、食料・寝具の設備はなかった。そこから山にかかる。針葉樹林の尾根の腹を捲いて一たん硫黄で黄色くなった沢へ下り、そこから屏風岩と呼ばれる長い大岸壁の裾にそって急坂を登ると、ラウス平という大きな斜面に出る。

2-8

Ich bin von Rausu aufgestiegen. Vom Dorf eine Stunde lang den Fluss Rausu aufwärts laufend, treffe ich die heiße Quelle“Rausu“, wo das Obdach mit der Verwaltung vom Dorf ist. Aber weder das Essen noch die Bettzeug da aufgehoben ist. Davon geht es aufwärts. Um den waldigen Bergrücken herum gehend , steige ich mal zum vom Schwefel gelb gefärbten Teich ab. Davon weiter steige ich entlang der Felsenwand namens „Byohbuiwa (Felsenwandschirm) auf dem langen und steilen Pfad auf, erreiche ich den großen Abhang namens Rausu-daira.

ラウス平は一面匍松の褥で、その豊かな広がりはこのんびりしていて美しい。季節にはお花畑になる。平の向こうには三ッ峰が立ち、三ッ峰から更に北すれば、サシルイ、オッカパゲを経て活火山の硫黄山まで近年道が開かれた。硫黄山の外輪をなす岸壁は壮絶な眺めだそうである。

2-9

Der Rausu-daira ist von der Kriechkiefer ganz bedeckt wie Matratze. Seine große Ausdehnung ist sehr gemütlich und schön .In der Jahreszeit wird es der Blumengarten. Über den Abhang liegt der Berg „Mitsumine“. Noch weiter in Norden des Mitsumines wurde die Abkürzung letztens via „Sashirui“und „Okappage“ bis zum tätigen Vulkan Iouzan eröffnet. Der äußere Wand von Kraterring des Iouzans soll ein tapfer und scharfer Ausblick haben.

羅臼岳の頂上へ私は立ったが、霧に包まれて何も見えなかった。ただオホーツク側から巻き上げてくるすさまじい風の音を聞くだけであった。

2-10

Ich stand auf dem Gipfel von Rausu aber sah gar nichts wegen des Nebels und allein hörte den furchtbaren Wind aus dem Meer Okhotsk heulen.

だから羅臼山岳会で書かれた記事によって、その展望を観察することにしよう。まず東を望むと足下に国後島が浮かび、その向こうに太平洋が広がって、遠く千島の列島が見える。南に向くと、知西別川上流の分水嶺のあたりに周囲5 kmに及ぶ無名湖（羅臼湖と呼ぶ人もある）があって、その周りに大小七つの沼が点在している。

この無名湖はクマザサや匍松のジャングルに妨げられて、今までそこまで達した人はごく僅かだそうである。西望すれば宇登呂港が眼下にあり、その先は茫茫たるオホーツク海である。北はすでにのべたように三ッ峰から硫黄山に向かう脊稜山脈が伸びている。

2-11

Daher lass uns den Ausblick laut dem Bericht über Rausu im „Alpenklub“ überlesen. Wenn man zuerst nach Osten sieht, sieht man unten die Insel Kunashiri schwimmen. Darüber bereitet sich der Pazifik aus und die Inseln Kurilen sind zu sehen. Nach Süden findet man ein namenlose See von 5 km im Umkreis in der Nähe Wasserscheide des Flusses Chi-nishi-betsu. Um den See sind sieben Teiche mit verschiedenen Göße verstreut. Die Leute haben selten bisher in den namenlosen See eingetreten, wegen des Dschungels von Kriechkiefer und Bambusgras. so sagt mann. Wenn man nach Westen überblickt, ist unten den Hafen Utoro, und die Okhotsk noch weiter unendlich. Nach Norden, wie schon gesagt, zieht sich die Gebirgsgekette „Sekiryoh“ lang von Mitsumine aus nach Ioh-san.

さいはての山として、北方的風貌をおびた山として、羅臼岳は私の記憶に深く残っている。近年羅臼温泉に立派な旅館が立ち、登山者も急にふえてきたようである。

2-12

Der Rausu kommt tief mir den Sinn als Berg im hohen Norden. Man sagt in letzten Jahren, die schönen Gasthäuser gebaut sind und die Aufsteiger auch rapid zunehmen.

12. Mai 2015

25. 06 2016

続く

事務局註：

深田勝弥会員は作家故深田久弥氏の甥という関係から名著「日本百名山」の独訳に挑戦されています。

6. デザイナー修行奮闘記 - 連載 13 (井上 晃良 記)

私の「鉄道デザイナー」への道

いよいよ美大受験

大学受験というのは、今も昔も受験生にとっては精神的に緊張するものである。私自身、卒業した日本の大学へは1浪して入学したので、不合格への恐怖というのは自身でも十分に理解しており、それは誰も変わらないように思う。それでも敢えて、今一度大学受験するのは、我が事ながら全くもって不可解な行動である。ただ、ドイツの大学でデザインの勉強をしたいがために選んだ道である。『当たって砕けろ』でもあるが、砕けて困るのは私の本心である。日本の美大受験も大学によって試験内容が異なるのだが、ドイツは初めてのことが多く戸惑い、また多くのブレーメンの知人友人に助けて貰いながら、何とか受験をすることができたのであるが、その違いに焦点を当てつつ、大学受験のためのフォルツハイムに行った2泊3日の旅行について文章を先に進めたいと思う。

大学へは渡独前から手紙でコンタクトを取っていたが、ドイツについてすぐブレーメンのゲーテの住所で大学へ連絡を入れたのは当然のこと。この時は日本からもそうであったように、もちろん手紙である。当時と今との最も大きな違いは、IT社会の恩恵にあずかれないことである。先方に必要なものは、英文の日本での大学卒業証明書と成績証明書。そして作品集。これは、大学卒業前に就職活動のために用意しておいたものを日本から家族に送って貰った。また、日本の大学で担当して頂いた教授からの推薦状も用意しておいた。これは必ず必要という訳ではないのだが、威力を発揮する場面もあるかと思い、準備していた。

ここでドイツの大学申請時に必要な書類のうち、日本の提出方法とは大きく異なる点について触れておきたい。日本の場合、大学に限らず学校からの証明書はすべて封印してあるのが通常で、未開封状態で提出する。学校からは幾らでも取り寄せることができる。しかし、ドイツではオリジナルは1通という考え方である。それをコピーし、公証人によってオリジナルであることを証明してもらい、公証人の印を押したコピーを学校に提出する。つまり日本で用意した封印入りの封筒を本来なら開けてはならない私が開けなければならなかった。このシステムの違いに面食らったのである。

ホストファミリーの私へのサポートもあって、ようやく入学試験の準備を整え、試験前日の早朝ブレーメンから大学のある南西ドイツのフォルツハイムに出発した。久しぶりに長距離の旅行である。当時 DB（ドイツ連邦鉄道）は、今と違い ICE もなくインターシティ（以下 IC）を使う。美大受験ゆえ筆記用具だけでなく実技試験の画材も持っただけの旅である。もちろん鉄道好き故、その目的が受験であれ鉄道旅行のプロセスは楽しいもの。今となっては滅多に乗る事ができない 6 人用個室の 2 等車を従えた客車列車で、牽引機関車はもちろん大好きな 103 形である。ただ、当時の IC 列車の牽引機関車は、ほとんどが 103 形なので、今のような希少な感覚はなかった。

何度か列車を乗り換えて最後はカールスルーエ駅で乗り換える直前のこと。何気なしに大学から届いた持ち物リストと自分の荷物をチェックしたら…何と画材の一部を忘れていることに気がついた。即座に自分の頭の中で色々な解決方法思い巡らせた。とにかく焦った。列車は間もなくカールスルーエ駅に到着する。ここで下車することに変わりはないが、既に夕刻になりつつある。私の頭の中は、どうやって明日の試験までに忘れた画材を調達することが出来るかだけだった。大学内に画材店があるか否かも不明で、もちろん携帯電話などない時代である。フォルツハイムとカールスルーエを比較すると明らかにカールスルーエの方が大きな都市である。そこで乗り換えのために下車したカールスルーエで画材を調達することにした。理由は 2 つで、既に夕刻のため、画材店が閉まる時刻が心配であったこと。ドイツの場合、大きな街の中心商店街には必ず画材店があるという確信があったことである。

（続く）

（本記事はイカロス出版株式会社発行『鉄道デザイン EX 03』に連載されたものを転載したものです。同社のご好意により転載の許可をいただいています。）

7. 第8回「ドイツフェスティバル in ぐんま」慰労会・反省会

8月6日(火) 県庁31階のレストランで慰労会を行いました。「ドイツフェスティバル in ぐんま」は設営から撤収まで業者の手を一切借りず、協会員や出店者の力でだけで行います。その設営から撤収まで参加された皆さんを慰労し、また次回へつなげる反省会でもあります。フェスティバル会場の提供をしていただいた県の担当者の方、場の雰囲気を高めてくれた音楽コーナー(前橋市フォークダンス協会と合唱のコール・詩音)の方々、出店者の皆さま、会員のみなさま全員で30名近い参加者が集まってくれました。

まず会長挨拶のあと杉本監事の発声で「乾杯」、とは言ってもほとんどが車の運転があるためソフトドリンクでの乾杯です。その後、立食スタイルでのイタリア料理を頂きました。それぞれのテーブルで会話の花が咲き乱れていました。

一息ついたところで「反省会」が始まりました。まず、各コーナーごとで感じられた事がいくつか紹介され、さらにいろいろな観点からの建設的な意見がたくさん出されました。これらの意見をよく協議してまとめていく作業にこれから取り組んでいくことになりました。

最後に對馬副会長の締めで終了しました。みなさま、最後までありがとうございました。

8. ドイツ人高校生の群馬短期留学終了

6月8日から7月28日までの7週間ドイツから高校1年生の女子生徒が群馬県に短期留学しました。ぐんま日独協会と長い付き合いのあるエアフルト独日協会からの依頼で斡旋を受け入れました。まずは受け入れていただく高校の選定から始まりました。明和県央高校が引きうけていただけるとのことで第一関門を突破しました。次にホストファミリーの選定です。多方面に声をかけて、結果的には、8月からフランスに1年間息子さんが留学するご家庭で面倒を見ていただけることになり、最大の難関を突破したかに見えました。ところが...

本人の来日後、すぐに極端な偏食が学校でも家庭でも明らかになりました。幼児期からの家庭での食事環境の影響だそうです。その他諸々があり、まず3週間後にホストファミリーが悲鳴を上げました。そこでぐんま日独協会が中に入りホストファミリーと本人との3者面談を行い、そこでお互いが遠慮しあって不満がたまってしまったことが分かり、それからはお互い遠慮せずに気持ちをぶつけあうことで納得しあい、涙の抱擁となり、7月28日に予定どおり帰国しました。

ホストファミリーとして他人を受け入れること、それも異文化の、またいろいろな個性の人間を受け入れることの難しさをいやという程感じさせられました。ホストファミリーのご家庭には本当に感謝しかありません。